

リスクマネージメントは医療の質を高めるために必要不可欠

安全な医療の実現は、医療機関にとってもっとも重要な課題の一つだ。しかし、日々の診療活動の中から医療ミスの芽を発見し、未然に摘み取っていく作業は、決して簡単なことではない。東京北社会保険病院では、富士通プライムソフトテクノロジーのリスクマネージメントシステム「SafeProducer」を導入し、迅速なインシデントの把握や集計を実現。素早い対応によって、安全な医療の実現を図っている。

医療情報の電子化に積極的に取り組む

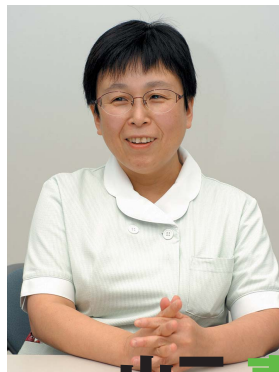
東京北社会保険病院は、2004年4月22日に診療をスタートした新設の総合病院である。運営は、社団法人地域医療振興協会。24時間365日体制で東京都北区の地域医療を担う中核病院であると同時に、東京都島嶼部などのへき地医療の支援も目的として掲げられている。

開院に合わせて積極的にIT化に取り組んだ同院では、ペーパーレスを目指して電子カルテの導入を行った。さらに、リスクマネージメントの重要性にも着目し、富士通プライムソフトテクノロジーのリスクマネージメントシステム「SafeProducer」を導入、7月1日から稼働を開始している。「リスクマネージメントでは、情報に透明性を持たせることが大切です。透明性を持った情報を全員で共有することで、的確な分析や効果的な対策を立てることができ、病院全体として医療の質を上げることができるのです」と語るのは、兼任リスクマネージャーを務める副看護部長の山元恵子氏だ。

電子カルテとの連動が同院のシステムの特徴

同院のシステムの特徴は、すでに導入されている電子カルテとの連動を実現している点にある。「SafeProducer」を選んだ大きな理由の一つも、この電子カルテとの連動を容易に実現できるというところにあったという。具体的には、電子カ

ルテの管理画面に「安全管理」という機能タブを用意し、ここから「インシデントレポート」と「文書参照」という2つの機能を利用することができるようになっている。



山元 恵子氏
東京北社会保険病院 副看護部長

電子カルテからリスクマネージメントシステムを利用するのは、一つには端末の台数の問題があるという。実は同院の場合、セキュリティの確保という面から、院内LANと電子カルテは別システムとして稼働している。そのため、端末台数の多い電子カルテから操作できるようにしたほうが、院内のスタッフ全員が利用しやすいからだ。もう一つ、電子カルテと連動させる大きな理由は、安全管理に関する考え方だ。「質の高い医療を提供する上で、安全管理は診療機能の一部だと考えています。そのためには、電子カルテから操作できるほうが、診療の一部としてより自然な流れなのです」(山元氏)。



東京北社会保険病院
東京都北区赤羽台4-17-56

- 運営: 社団法人 地域医療振興協会
- 設立年月日: 平成16年3月1日
(診療開始日: 平成16年4月22日)
- 診療科目: 18診療科
- 病床数: 280床(内、小児30床/開放型5床/ICU5床)
- 診療時間: 8:45~16:30(平日)、
8:45~12:00(土曜日)、日・祝日休診

今後は院内コミュニケーションツールとしての利用も

実際の導入に当たっては、各部署のリスクマネージャー研修や全体研修など、導入教育を3回ほど行った。項目選択が中心で操作性に優れた「SafeProducer」の特徴もあり、電子カルテなどで端末操作に慣れたスタッフにとっては、ほとんど問題なく利用できているという。山元氏は、「安全管理は、日々継続して推進していくことが重要です。そのためには、システムを入れただけではだめで、組織として運用面で安全管理を確立していく必要があります。その意味でも、継続的なリスクマネージメント研修やスタッフ同士の安全意識の共有が大切なのです」と、研修の重要性を強調した。

報告されるインシデントレポートは、現在月に約100~130件。なかには、「患者さんが診察用の椅子でつまずくことが多い」といった報告などもある。山元氏は「起きそうなこと、気づいたことなど、些細なことでも情報を出し合うことが安全管理につながり、医療の質を上げることができるのです。今後は、単に事故を防ぐためのシステムという捉え方ではなく、一種のコミュニケーションツールとして院内の情報交換に活用していければと考えています」と、将来的なシステムの有効利用についても語っている。

「SafeProducer」に関するお問い合わせはこちら